天使が家にやって来た！？

酉木 言心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使が家にやって来た！？

【Ｎコード】
Ｎ６８４２Ｂ

【作者名】
酉木　言心

【あらすじ】
天使になる為にとある高校生の家に居候する天使実習生と、居候主である高校生とその取り巻きのドタバタストーリー。「俺に安穏とした日々は訪れないのかぁ！？」注）多分永久に更新されないと思います。

０１：犯罪者なのか否か……

ども、はじめまして、陸（くが）　海斗（かいと）って言います。
年は１６才、高校２年生で、弓道部に所属してます。
さてと、自己紹介はこんなもんで良いかな。

で、何で自己紹介する事になったのかと言うと、

「カイく～ん、こーゆーのはツカミが肝心なんだからね！」

はい、この声のせいです。

何者かはもう、今でも信じたくねーし、信じる気にもならねぇし。

ま、詳しい事はこれからのお話しを見てくれるのが一番だわ。

～～～～～～～

ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ、ピピピピ、ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ。

「だー！うるせーーーーぇ！！！」

はぁ、毎朝５時に起きる為とは言え、異常にうるさいな、この目覚まし。

さて、今の時間わっと。

…………４時ジャスト…………夜明け前じゃねぇかよ。

あぁもう！二度寝だ二度寝。

３０分ぐらい寝れるだろ。

ドッシーーーン！

「いってーーー！！」

な……天井から、に、鈍い痛みがぁ……

「おっはよーございまーす、カイく～ん。」

……あれ、あの目覚ましボイス機能付いてたっけ？

「おーはーよーおーごーざーいーまーす！」

「うるせぇ！！糞目覚ましが！！」

もう勢いで布団を投げ飛ばす俺。普段はめちゃくちゃ朝弱いんだけどなぁ。

「ヒャン！

いったぁ～～い、うら若き乙女を投げ飛ばすなんてぇ～～。」

えーと、とうとう俺の目はイカレちまったか？
ベッドの対角線上に人が居るように見えるんだが……

「あ、やっと起きたぁ～。おはようございます。カイ君♪」

誰だこいつ。言っておくけど俺一人っ子だから。

オマケに外人に知り合いが居る訳じゃ無いぞ。対角線上に居る奴が金髪で青色の目だけど。

「えーと、とりあえず１１０番１１０番っと。」

「スターーーーーーップ！！

落ち着いてカイ君！話せば分かるから！」

「あいにく俺は健全な日本国民なんでね。『犯罪者を見つけたらケーサツにたれ込む』。
ジョーシキだぞ、ジョーシキ。」

「あああああアタシがはははははは犯罪者ぁぁぁぁぁぁ！？」

「あったりまえだ。住居不法侵入の上、居住者を傷害したんだからな。

っと、ケーサツにたれ込む間に逃げられても困るし…」

「かかかかかかカイ君？

ななななな何でロープなんかがベッドルームにあるの？

それに、めめめめ目が恐いよ……って

ちょっとカイくーん！やーめーてー！」

～～～～～～～

何か奇妙な構図だな。
縄で体中くくられて、うつ伏せになってる女がいて、ベッドに座ってる俺。
端(はた)から見たら変な勘違いされるぞ。

「そーかそーか、お前は天使の実習生で、実習の為にこの家に居候に来た……と、分かった信じよう。」

「って訳に行くかボケェ！！」

ガッチャーーン

「ひぁ！伝説のちゃぶ台返しぃ！」

「ったく、誰がそんなおとぎ話を信じるかよ。」

「むぅ～～、じゃあ、証拠があれば認めてくれますかぁ？」
「あぁ、一発で『こいつは天使だ』って認めれるもんを出して見ろよ。そしたら居候させてやる。」
あるわけねえだろ、んなの。

「まずは～、翼～。」

おいおい、まさかマジで生えるんじゃあねぇだろうな。

ポンッ

「あー、えーと……まず、なんだそりゃ。」

「何って翼だよ？」

「生えてねえじゃねかぇか。」

あー、自称天使の肩甲骨あたりに確かに翼はある。

でも、生えてねぇし、なんつーか『浮いてる』って感じ。

良くわかんねぇか。やっぱ。

「どう？認めてくれた？」

「うーーーん、ギリギリ、かねぇ。」

翼には、まぁ違いねぇからなぁ。

「やったーーー……

ねぇカイ君、今、何時？」

「え、えーと、……7時半……」

５時に起きて弁当作る予定だったのに……

えーと、学校の始業時間が８時半、
学校に行くのに必要な時間がだいたい３０分ぐらい。

つまり、タイムリミット３０分。

３０分……

３０分！？

「おい天使！これから俺のやることに一切口出しするな！」

「は、は～い。」

～～～～～～～～

と、言うわけで、こいつとのファーストコンタクトはこんな感じ。

『ケーサツにたれ込む』ってのは天使との話が長引いたせいで断念。
ま、後で無理な話だって判明するんだけど。

「ねぇカイく～ん。アタシにも自己紹介させてよ～。」

「はいはい、分かった分かった。」

「えーと、みなさんはじめまして！
天使実習生のクリスティーン・ファン・ドミニオンです！
よろしくねー！

それじゃカイ君！張り切って行くよぉ！」

「はいはい。

まぁ、そういう訳で、みなさんよろしくお願いします！」

02：みっしょんぽっしぶる（前書き）

えーと、スイマセン！ほったらかしてました！

ごめんなさい！

m（＿）m

02：みっしょんぽっしぶる

……やばかったぁ。

8時半まであと3分で教室に滑り込み。

あのクリスティーンとか言う天使のせいでこんな目にあったんだが、居候するとなると、毎日こんな感じか？

冗談じゃねぇ。

んでもって、今は一限目が終わって休み時間なんだが……

「はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～。」

「おい、どうした、深淵から聞こえてきそうなため息ついて、らしく無いぞ、海斗。」

「あぁ、博雅（ひろまさ）か。

はあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～」

こいつはクラスメートの佐々木（ささき）　博雅（ひろまさ）、おんなじ弓道部だ。

小学校は入る前はピアノやってて、小学校からはバイオリンやってて、中学校では吹奏楽で全国大会に行ったことがあるらしい。

とーぜん、高校でも吹奏楽だろうってのが下馬評だったけど、見事に予想を裏切って弓道部に入ってきた。

クラスがおんなじな事もあって、友人付き合いしてる。
ちなみに席も隣同士。
「だからどうしたんだ。寝不足か？」
「当たらずとも遠からずってとこかな。」
「なんだそりゃ。
さてはおめぇどっかの女を引きずり込んで、朝まで（自主規制）してたんじゃ？」
「アホ、お前とは違うんだお前とは。」
一見真面目そうな顔してる博雅、実は結構女好き。こいつ曰く、『全ての女は俺を待っている』らしい。アホか。
「アホは無いだろ。なぁ、海斗。」
「うるせぇ、なら破〇恥男が良いか？」
「にしても今頃登校してる奴がいるぞ。
ありゃあキバ先の餌食になるな。」
キバ先ってのはうちの高校の生活指導の先公で、本名　金牙（かねきば）　爪太（そうた）。
マッチョで恐ろしくて涙もろいってのはお約束っての？
あれに捕まったが最後、３時間は保健室のベッドに横たわる事にな

るな。

「で、俺の話を無視するな、破廉〇博雅。」

「失礼な！女は好きだが〇廉恥な事は一切しないぞ！」

「あぁハイハイおめでとさん。」

「うわっ！ひでぇ！」

『ほんっと、酷い事言うね、カイ君は。』

「黙れ、二人とも。」

ん？何か違和感があった気が……

と、言うわけで少し巻き戻し・・・

＞『あぁハイハイおめでとさん。』

＞『うわっ！ひでぇ！』

＞『ほんっと、酷い事言うね、カイ君は。』

＞『黙れ、二人とも。』

＞『黙れ、二人とも。』

＞『二人とも』

博雅と……

「てめぇ何でここに来たぁ！天使ぃ！」

「だって暇だもーーん。」

「つーか何時来たんだ！」

「ん～？ついさっきだよ～。」

「きっ、キバ先はどうした！キバ先はぁ！」

「あぁ、下駄箱にいたマッチョの事？
アタシが見えないみたいだからくすぐりにくすぐって気絶させた。」

「み、見えないって……」

「そりゃ天使は普通の人には見えないでしょ。たまに居るけど、見える人。
ほら、そこの男の子みたいに。」
『そこの男の子』ってまさか……
「……」
ビンゴ、博雅だった。口パクパクさせてるし。
「……か。」
「おい、博雅。頭大丈夫か？」
「……可愛い。」
「はぁ！？マジで大丈夫か？」
「何を言う！俺は至って正常な思考の下に可愛いを弾き出したんだぞ！」
「はいはい、で、天使。おめぇロープはどうした。」
「超越である私を束縛する物を滅却するなど稚戯（ちぎ）に等しい！」
なんか爆弾発言だな。
「ろ、ロープ？まさか海斗お前……」
「？」

「S〇趣味だったなんて。」

「よーしてめぇそこになおれ、今からてめぇの腐った……」

「実はこのカイ君はあろうことか私を押し倒してロープで縛り、挙げ句今の今まで放置プレーを……」

「貴様海斗ぉぉぉぉぉぉぉぉ、こんな可愛い天使ちゃんにあんなことやこんなことをしたのかぁぁぁぁグフッ。」

「朝っぱらから何3人でバカ騒ぎしてるのよあんた達。」

『グフッ』の声とともに崩れ落ちた博雅の影から現れたのは……

俺の幼なじみで天使が見えているであろう女子。
日柳（くさなぎ）　薫（かおる）だ。

「にしても、可愛いわね〜この子、海斗、知り合い？」

天使の頭をワシャワシャしながら聞いてくる。

おいコラ天使、満更でもない顔するな。

「え？あーえーとねー。

私は〜、カイ君のフィアンセでーす。」

イッチャッターーーー！！！

「へ～、幸せにね～。」

さりげなくさらっと流せるってすげぇな。おい。

で、今になってよーやく気づいたんだが、こいつの服装……

うん、まぁ天使らしいっちゃ天使らしいんだが、ギリシャのポリスの頃の服装だな。うん。

わかんない？自分で調べてくれ。

「ねぇ天使ちゃん、名前何なの？」

「私の名前は、クリスティーン・ファン・ドミニオンです！」

「そっか、私は日柳薫、宜しくね！」

「はい！」

あっと言う間に友情成立。はえーなぁ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「た、ただいま……」

「たっだいまぁ！」

元気だなおい。

あの天使ほんとに天使か？

なんか悪魔に見えてきた。

というのも、

どこからともなく持ち出した下敷きでクラス中の女子の髪を逆立て始め（薫は除いて）、挙げ句ヘアースプレーで固めるわ、気絶してたキバ先の顔に落書きするわ、寝てる奴の手を持ち上げてセンセイがそいつを名指ししたら立ち上がらせて起きた所をくすぐるわ・・・

疲れたぁぁぁぁぁ・・・・・

「カイ君！ご飯ご飯！」

あげくに飯の催促ときたもんだ、こりゃ過労でいつか死ぬな、俺。

「カイ君！服服！」

今度は服かよ、・・・まぁあの超時代遅れよりはましだろうから買ってやるか。

「カイ君！芋虫芋虫！」

・・・・・それは・・・ちょっとなぁ。

「カイ君！金塊金塊！」

「買えるかボケェェェ！」

無理だろ、金塊って・・・・

「まぁいいや、早くご飯ーー！」

別にいいのかよ！なら言うな！

「待て待て、今作るから。」

「イエェェェェイ！」

博雅よ・・・こんな奴いくらでも貰ってくれ・・・好みなんだろ？あぁ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6842b/

天使が家にやって来た！？

2011年1月13日05時12分発行